

小林市教育研究センター

I	研究主題	1-6-1
II	主題設定の理由	1-6-1
III	研究目標	1-6-1
IV	研究仮説	1-6-2
V	研究構想	1-6-2
VI	年次計画	1-6-3
VII	研究組織	1-6-3
VIII	研究内容	1-6-3
1	0歳児からの教育研究グループの取組	1-6-3
(1)	昨年度の取組を受けて	1-6-3
(2)	組織及び作業の進め方	1-6-3
(3)	幼児用紙芝居部会の取組	1-6-4
ア	ねらい	1-6-4
イ	紙芝居作成の概要	1-6-4
ウ	活用法	1-6-4
エ	アンケート結果の分析と考察	1-6-4
(4)	保護者用テキスト部会の取組	1-6-5
ア	体育・食育班 「元気に学校生活を送るために」	1-6-5
イ	徳育班 「楽しい学校生活を送るために」	1-6-5
ウ	知育班 「スムーズに学校生活を送るために」	1-6-5
2	授業づくり研究グループの取組	1-6-6
(1)	授業分析について	1-6-6
(2)	意識啓発班の取組	1-6-7
ア	ポイント集の作成について	1-6-7
イ	授業チェックシートの作成について	1-6-7
(3)	授業研究班の取組	1-6-8
ア	検証授業1（小学校）	1-6-8
イ	検証授業2（中学校）	1-6-9
IX	成果と課題	1-6-10
1	成果	1-6-10
2	課題	1-6-10
○	研究同人	1-6-10

I 研究主題

「学びたい」「学ばせたい」気持ちを高める小林教育の実現 ～就学前教育の充実を図る教材開発と主体的な学びを重視した授業づくりを通して～

II 主題設定の理由

これからの社会は、国際化、高度情報化、少子高齢化、雇用環境の変容など、児童生徒を取り巻く生活環境は日々変化していくことが予想される。そのような社会を生き抜くために必要とされる力は、知識の習得ばかりでなく、実社会で活用できる汎用的能力である。その中には単なる知識の習得や情報活用のみならず、思考の方法や自律的に行動する能力等といった、態度（情意）面の要素も含まれている。すなわち、常に主体的であることが必要とされており、社会で起きている事象や身の回りの課題について、自ら情報を収集し、納得したことを基に自ら考え、判断し、行動するということが求められている。

本県においては、昨年度の第二次宮崎県教育振興基本計画の改訂において、個人の多様な能力・個性を最大限伸ばさせ、生涯にわたり自己実現ができる人材づくりや郷土愛、あるいはグローバルな視野を育むとともに、地域・社会の一員としての自覚を培うことで、国内外に開かれた「みやざき新時代」を築く人材づくりを推進していくことが示されている。

本市においては、市の将来像として、「霧島の麓に人・産業・歴史・自然が息吹き、元気あふれる交流都市」を目指しており、この将来像を実現していくために、平成26年度「0歳から100歳までの小林教育プラン」を策定して、『学びたい』『学ばせたい』気持ちを高める小林教育」を教育目標とし、学校教育、社会教育、スポーツ振興の各分野の取組の充実に努めている。

そこで、本研究においては、本市の取組の具現化を図るために、昨年度から、就学前と小・中学校段階における教育について、それぞれ次のような考え方で取組を進めていくこととした。

まず、就学前の段階においては、小林市民として必要な教育内容を盛り込んだ幼児向け紙芝居の作成や保護者向けテキストを作成してきた。このことによって子どもと親双方の学びを推進し、情意面を高める0歳児からの教育の充実を図り、生涯にわたって学び続けるための素地を養うことができると考えている。

次に、小・中学校段階においては、昨年度の研究で児童生徒及び教職員の実態調査から「児童生徒が学習に対してやや受動的」「児童生徒の相互の関わりを重視した学習活動の工夫の必要性」などの主体的な学びに関する課題が明らかとなった。そこで、目指す児童生徒の具体的な姿を「個が学習意欲や課題意識をもち、考えを交流させ、自分の力で解決できる児童生徒」とし、これを実現するために主体的な学びを重視した授業づくりについて研究を進めている。このことによって、主体的に考える力や自ら意欲的に学ぶ児童生徒を育成することができると考えている。

このように、本研究センターにおいては、上記のような実践的な研究を行うことで、本市の掲げる『学びたい』『学ばせたい』気持ちを高める小林教育」の具現化を目指すことができるのではないかと考え、本主題を設定した。

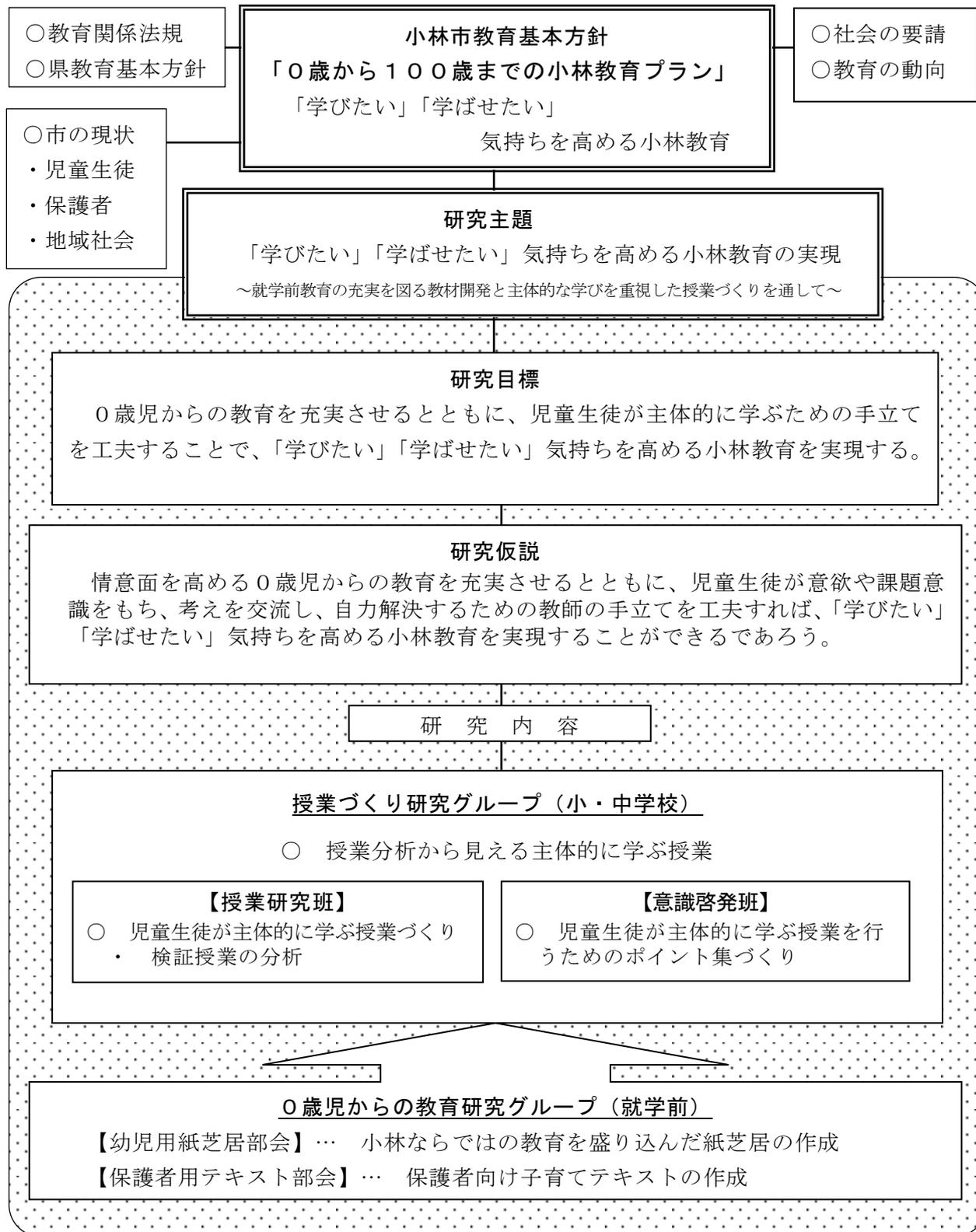
III 研究目標

0歳児からの教育を充実させるとともに、児童生徒が主体的に学ぶための手立てを工夫することで、「学びたい」「学ばせたい」気持ちを高める小林教育を実現する。

IV 研究仮説

情意面を高める0歳児からの教育を充実させるとともに、児童生徒が意欲や課題意識をもち、考えを交流し、自力解決するための教師の手立てを工夫すれば、「学びたい」「学ばせたい」気持ちを高める小林教育を実現することができるであろう。

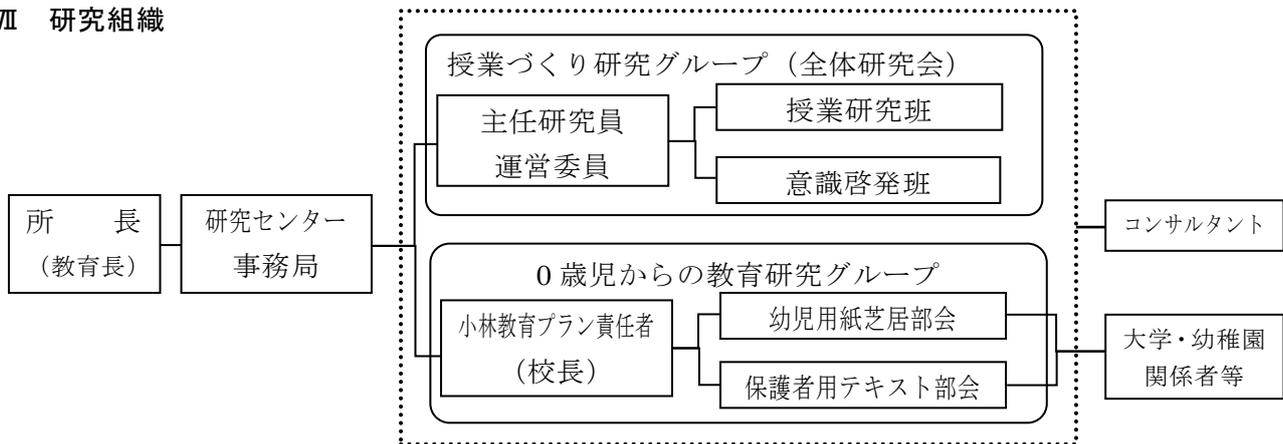
V 研究構想



VI 年次計画

	0歳児からの教育研究グループ	授業づくり研究グループ
平成27年度	○ 保護者用テキスト（0歳児～6歳児対象）や幼児用紙芝居（3歳以上対象）を作成する。	○ 実態調査を基に、主体的な学びについての理論を構築し、授業改善の方法を探る。
平成28年度	○ 保護者用テキスト（6歳児対象）や幼児用紙芝居（3歳児以上対象）を作成する。	○ 授業実践を通して手立ての効果を検証するとともに、ポイント集を作成する。

VII 研究組織



VIII 研究内容

1 0歳児からの教育研究グループの取組

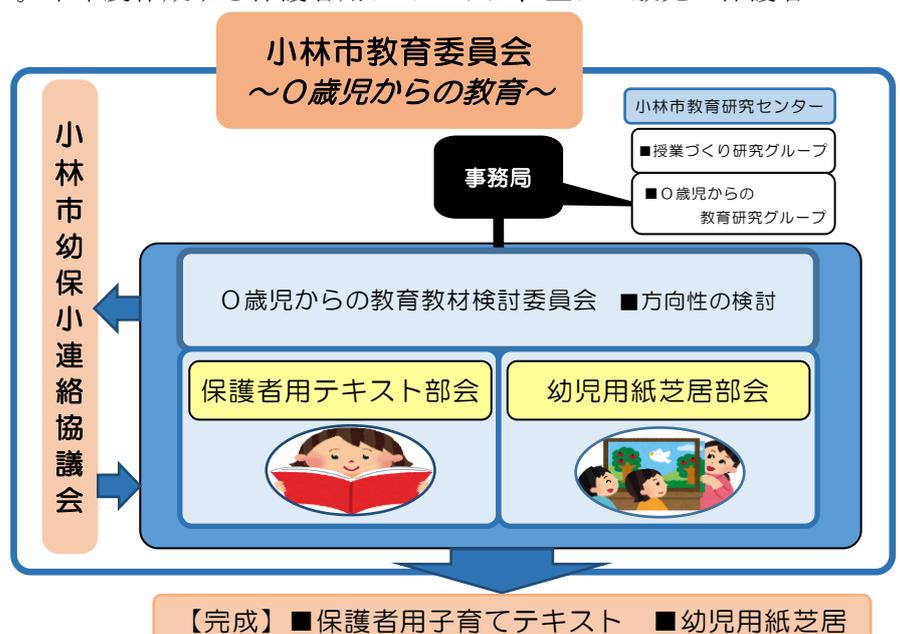
(1) 昨年度の取組を受けて

昨年度、小林市で安心して子育てができる拠りどころとなるよう、妊娠期・乳幼児期と幼児期の段階ごとに子育ての基礎的な知識を伝える保護者用テキストを作成し、母子手帳配付時と幼稚園・保育園等の入園児に配付した。また、3歳以上を対象として、主に感謝する気持ちを高めるために、「ありがとう」を伝える場面が数多く出てくる内容で、幼児用紙芝居「ホタルのトンネル」を作成し、幼稚園や保育園、小・中学校、図書館等に配付した。

本年度は、それぞれの活用状況を把握し、効果的な活用の在り方について検討するとともに、それぞれ第2作を作成した。本年度作成する保護者用テキストは、主に6歳児の保護者を対象として、小林市立各小学校で行われる新入児保護者説明会の共通資料として活用した。また、幼児用紙芝居は、主に自立の芽を育てることをねらいに作成し、昨年度同様、関係機関に配付して活用していく。

(2) 組織及び作業の進め方

保護者用テキストと紙芝居作りについての具体的な作業は、「0歳児からの教育研究グループ」が事務局となり、大学や幼稚園関係者等からなる「0歳児からの教育教材検討委員会」での協議・検討をもとに進めている（図1）。



【図1 0歳児からの教育】

(3) 幼児用紙芝居部会の取組

ア ねらい

知・徳・体・食に係る豊かな感性を幼児期から育て、小学校への円滑な連携を図ることを目的に、昨年度に引き続き紙芝居を作成する。第2作となる本作は、「将来、自立するための力」をテーマに、幼児が楽しみながら「やってみよう」という意欲をもてるものとする。



【 図2 紙芝居 】

イ 紙芝居作成の概要

- 対象年齢は、3歳以上。
- テーマは、自立。
- 登場人物は花ちゃん、空くんの姉弟（第1作に引き続き）。
- 自然、特産物等の小林のよさ・小林らしさを紙芝居の中に表す。

ウ 活用法

- 作成した紙芝居を、市内全ての幼稚園・保育園、小・中学校、図書館等に配付し、子どもの実態に応じて活用する。
- 中学校において、職場体験学習や文化祭等の学校行事で活用する。
- 保健所や公民館等の各種検診時や講演会の際に活用する機会を設ける。

エ アンケート結果の分析と考察

昨年度作成した紙芝居の活用状況を把握するとともに、更なる紙芝居の活用を図るために、7月にアンケートを実施した。

【表1 アンケートの結果】

1	4月に配付した紙芝居「ホテルのトンネル」を活用していますか。
ア	活用した（36施設）
イ	まだ活用していない（13施設）
※	活用人数（延べ人数）
	・図書館…116人 ・保育園・幼稚園…1296人
	・小学校…440人 ・中学校…44人 合計 1896人

5	今後の活用予定
○	ホテルの時期になったら活用したい
○	文化祭で発表したい
○	道徳の時間にも使えそう
○	保育園の職場体験で使えそう
○	参観日などで使いたい
○	集会で使いたい

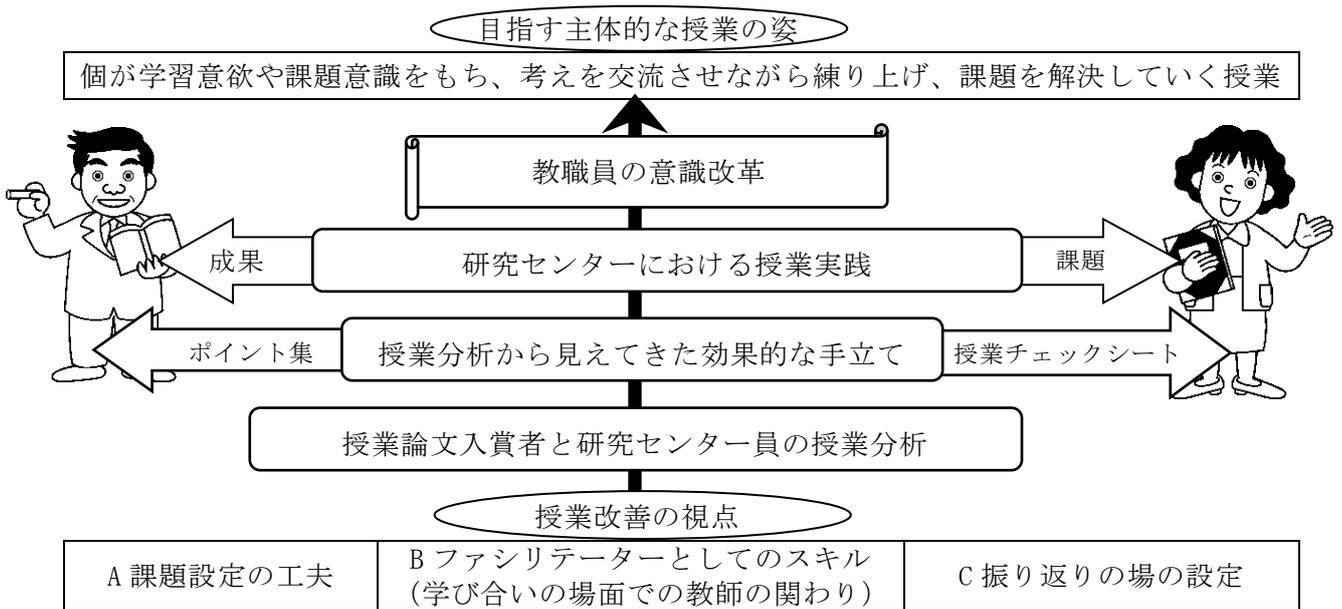
分析と考察

- 概ねよく活用されている（36施設）。活用していない施設（13施設）の多くは中学校であった。
- 中学校は、今後、読み聞かせの読み手としての利用が考えられる。
- まだ活用していないところでも、ほとんど今後の活用予定があった。
- 聞き手、読み手のそれぞれの反応は、好意的なものが多かった。
- これまでの活用例や今後の活用予定には、参考になるものがたくさんあった。

2 授業づくり研究グループの取組

(1) 授業分析について

昨年度の研究では、児童生徒や教職員への実態調査をもとに目指す主体的な授業の姿や授業改善の視点を明らかにすることができた。本年度は、主体的な学習を行うために必要な手立てを明らかにし、授業実践を行い、そのことを小林市内の教職員へ広めることで意識改革を行うことが大切であると考えた。そこで、研究センターの研究をより具体的に、そして小林市内の先生方の意識改革につながるものとして、小林市で行っている授業論文入賞者の授業と研究センター員の授業を比較する授業分析を行った。児童生徒が主体的に学ぶ授業は、学習者中心の授業であり、教師の発言時間が長ければ長いほど、児童生徒の主体的な学習の時間が短くなる。そのような考え方から教師の発言時間や発言内容、さらに昨年度明らかにした授業改善の視点をもとに授業分析を行った。



授業分析を行ってみると、教師の発言時間については、授業論文入賞者の授業の方が平均すると5分ほど短かった。課題設定の工夫やファシリテーターのスキル（学び合いの場面での教師の関わり）、振り返りの場の設定についても、授業論文入賞者の授業では、児童生徒が主体的に学習に取り組むための具体的な手立てが講じられていた。特に、学び合いの場面における手立てや個に応じた手立てなど研究センター員の授業に比べて工夫が多く見られた。

【表2 授業分析の結果】

教師の発言時間（平均）			授業分析から見た効果的な手立て
入賞者	小学校	中学校	A めあて（学習課題）が明確で分かりやすい。
	10分 (授業論文6本)	10分 (授業論文4本)	A 児童生徒の発言を活用しての学習課題の設定が行われている。 B 教師の発言が精選されている。
研究員	小学校	中学校	B 個に応じた手立ての工夫がなされている。
	16分 (授業4本)	16分 (授業6本)	B 学び合いの場面での見届け、発問など教師の手立てが充実している。 B 学び合いの場面で意図的指名を行い、話し合いの視点や学習内容の焦点化を図っている。 C 振り返りの時間がしっかり確保されている。

授業分析をもとに、主体的な学習を行うためのポイント集づくりを行ったり、そのポイント集をもとにした授業を行ったりして、授業改善の視点について検証を行うことで、研究センターの研究内容を小林市内の教職員へ啓発していく。

(2) 意識啓発班の取組

意識啓発班では、授業分析を行った結果をもとに、小林市内の教職員の意識改革をするために「児童生徒が主体的に学ぶ授業」を行う上で大切なことをまとめたポイント集と授業チェックシートを作成することにした。作成したチェックシートとポイント集は、市内のすべての先生方に配布し、普段の授業はもちろん、校内の授業研究会などでも活用できるように、市教育委員会、校長会、市教育フォーラムなどを通じて情報を発信していく予定である。

ア ポイント集の作成について

授業分析から見てきた授業改善のための様々な手立てを、以下のように大きく9つのポイントとしてまとめた。授業の流れに沿ってイメージしやすく、授業づくりを行う上で役立ててもらうためにリーフレットの形で作成した。

【図6 作成したリーフレット】

イ 授業チェックシートの作成について

授業チェックシートは、ポイント集の作成に合わせて、授業を繰り返すためのきっかけとなるように作成した。

それぞれの項目は、ポイント集の9つの項目とリンクしており、自己評価の低かった部分を確認することで、必要な手立てを中心に確認できるようにした。

小林市教育研究センター 授業チェックシート			
展 開	導入	Q, その時間に何を学習するのか、教師も子どもも理解できていますか。	<input type="checkbox"/> できている <input type="checkbox"/> できていない →①「ゴールイメージを共有化」へ
	展開	Q, 個人思考の時間を確保するなど、自分の考えを持たせる工夫をしていますか。	<input type="checkbox"/> できている <input type="checkbox"/> できていない →②「自分の考えを持たせよう」へ
		Q, 子ども達は自分たちの考えを発表したり、深めたりすることができていますか。	<input type="checkbox"/> できている <input type="checkbox"/> できていない →③「学び合いの手法」へ
		Q, 学習のねらいにせまるように、子どもの意見	<input type="checkbox"/> できている <input type="checkbox"/> できていない

【図7 授業チェックシート】

(3) 授業研究班の取組

授業分析や昨年度の研究内容、意識啓発班が作成したポイント集をもとにして、検証授業を行った。検証授業の仮説やポイントを以下のように設定した。

【検証授業の授業仮説】
検証授業において、児童生徒の実態に応じた課題設定を行い、学び合いの段階で発問の精選や個に応じた手立てを工夫すれば、児童生徒一人一人が主体的に学習に取り組み課題を解決する姿が見られるであろう。
【検証授業のポイント】
<ul style="list-style-type: none"> ○ 児童生徒の実態に応じた課題設定がなされているか。 ○ 学び合いの段階における発問の精選や工夫がなされているか。 ○ 学び合いの段階における個に応じた手立てがとられているか。

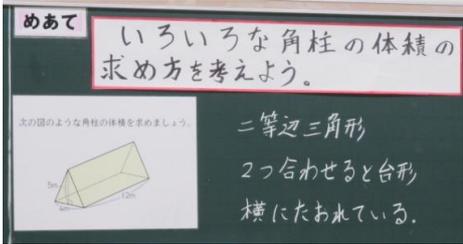
ア 検証授業 1 (小学校) ※ 下線部は授業における具体的な手立て、丸数字はチェックポイントとの関連
第 6 学年 「算数」 単元名「立体の体積」

(ア) 児童生徒の実態に応じた課題設定について

本時では、体積の求め方に対する児童の多様な考えを引き出した上で「角柱の体積＝底面積×高さ」の公式に収束させていくことをねらいとして教科書に学習問題として示されているAの立体ではなく、練習問題として示されているBの立体を学習問題として用いた。

①Bの立体は、体積を求めるために多様な考え方ができるとともに、底面の捉え方を確認するためにも有効であると考えた。

成果	「平行四辺形の体積を求めて半分にする」「直方体の体積を求めて半分にする」「三角形の面積を求めて高さをかける」など、児童の多様な考え方を引き出すことができた。
課題	本時の学習が多様な考え方を引き出すだけで終わらないように、角柱の公式にまとめることをめあてに明示し、意識させる必要があった。



【写真1 学習問題とめあての板書の様子】

(イ) 学び合いの段階における発問の精選や工夫について

自力解決後の学び合いの段階では、児童が自分と友達の考えや友達同士の考えを比較し、疑問に思ったことや気付いたこと、式の意味等を話し合うことで問題の解決を図りたいと考えた。そこで、④**意図的指名**により3つの考え方「平行四辺形の体積を求めて半分にする」「直方体の体積を求めて半分にする」「三角形の面積を求めて高さをかける」を取り上げ、②⑥**話し合う対象を焦点化**した。また、④**児童の発言の要点を板書**したり、必要に応じて図形に補助線を加えたりすることで児童の理解を促すようにした。

成果	児童の多様な考えを把握して意図的指名につなげたり、学び合いの途中で児童が図形に書き込んだ補助線を取り上げたりした点は、児童の考えを学び合いに生かすという点でよかった。
課題	友達の式を見て、求め方を大まかに説明しようとする児童はいたが、底辺がどこで高さがどこなのか、算数の言葉と意味にこだわって説明したり質問したりする児童は少なかった。児童同士の学び合いが深まるように適切な補助発問をする必要があった。



【写真2 児童の考えを板書した様子】

(ウ) 学び合いの段階における個に応じた手立てについて

学び合いの段階で発言することが苦手な児童は多い。そこで、本時では、④**意図的指名**によって取り上げた3つの考えをホワイトボードに書いて掲示し、それに対する⑤**疑問や気づきをノートに書かせてから学び合い**に入るようにした。

また、三角柱や底面が長方形や平行四辺形の角柱など、②**児童の思考に応じた複数の模型を準備**し、児童が自分や友達のを説明する際に活用できるようにした。

成果	友達の考えに対する疑問や気づきを書かせたことにより、自分の考えをもって学び合いに臨むことができた。
課題	教師は、児童の疑問や気づきを把握して発言を促したり、複数の模型を活用できるようにして、児童の双方向的な学び合いを支援する必要があった。 学び合いは経験が必要であるため、日頃から教師が学び合いを意識した授業を展開する必要がある。



【写真3 模型を使って説明する様子】

イ 検証授業2（中学校） ※ 下線部は授業における具体的な手立て、丸数字はチェックポイントとの関連
第2学年 「社会科」 単元名「関東地方～首都・東京と各地の結びつき～」

(ア) 児童生徒の実態に応じた課題設定について

導入段階で東京都への人口集中について触れる。そして、①**実際には東京に住まず、遠方からの通勤者がいる理由を本時の学習課題**とすることで、生徒に疑問をもたせるようにした。また、デジタル教科書の通勤者の音声インタビューを活用し、学習課題への関心を引くようにした。

成果	既習事項の確認や資料の提示などのICTの活用は効果的であることが確認できた。 興味関心を高くもち、資料を読み取り、課題解決をしようとする意欲が見られた。
課題	学習課題にいかに素早くつないでいくか、時間配分を含めて考えていく必要がある。



【写真4 デジタル教科書の活用の様子】

(イ) 学び合いの段階における発問の精選や工夫について

グループでの学び合いの中で、②**個人で資料を読み取り**、気付いたことを③**交流**させるようにした。多様な資料を準備し、多くの視点から課題解決できるよう④**意図的指名**などの発問の精選を行った。

成果	生徒の考えを見届けた上での学び合い段階における意図的指名は効果的であった。 小集団で考えを交流させる場面を取り入れた事で、相手の考えをもとに自分の考えを修正しようとする姿が見られた。
課題	話し合いを深めていくためには、意見の根拠を述べる必要がある。



【写真5 児童の考えを板書した様子】

(ウ) 学び合いの段階における個に応じた手立てについて

つまずきの見られる生徒に②『視点カード』を準備した。さらに、まとめにつながる⑦『キーワードカード』を提示するようにした。
 学習課題の解決のポイントになる⑦資料の精選や思考の流れがつかめる⑦ワークシートを作成、準備した。

成 果	ヒントカードやキーワードのカードを活用することで、全員が学習のまとめを行う事ができた。 読み取るための資料を多数準備した事で、資料を通して一人一人が課題に向き合う事ができた。
課 題	小集団や全体で発言できない生徒に対してどのような支援を行っていくかを考えていく必要がある。 小集団になった際の話合い活動の時の教師の見届け方や支援の在り方について考える必要がある。



【写真6 資料を活用している様子】

2つの検証授業を通して、「児童生徒の実態に応じた課題設定」や「学び合いの段階での発問の精選」、「個に応じた手立ての工夫」など9つのチェックポイントを踏まえた授業づくりを行うことは、主体的に学ぶ児童生徒の育成に繋がることが明らかになった。

IX 成果と課題

1 成果

- 幼児教育に係る各種機関との連携を図りながら、紙芝居とテキストを作成したことで、就学前の子どもたちとその保護者に、『学びたい』『学ばせたい』気持ちを高める小林教育について啓発することができた。
- 授業分析を通して見えてきた「児童生徒が主体的に学ぶ授業を行う上で重要な要素」をもとに、ポイント集やチェックリストを作成し、検証授業を実施することで授業改善に必要なことが明らかになってきた。

2 課題

- 紙芝居とテキストについて、効果的な活用方法について研究を進めていく必要がある。
- ポイント集やチェックリストを活用して、小・中学校で授業実践を進め、手立ての効果を検証する必要がある。

○ 研究同人

所 長	中屋敷史生	(小林市教育委員会教育長)	研 究 員	曾山 正人	(小林市立須木中学校 教諭)
教育部長	山下 康代	(小林市教育委員会教育部長)	研 究 員	岩崎 香恵	(小林市立野尻中学校 教諭)
教育指導監	大山 和彦	(小林市教育委員会学校教育課教育指導監)	<0歳児からの教育研究グループ>		
事務職員	古沢 博文	(小林市教育委員会学校教育課主幹)	総括リーダー	本部礼次郎	(小林市立須木小学校 校長)
指導主事	田村 智宣	(小林市教育委員会学校教育課指導主事)	班長(テキスト)	馬場田享子	(小林市立西小林小学校 教諭)
指導主事	二方 和也	(小林市教育委員会学校教育課指導主事)	班長(紙芝居)	竹森 文洋	(小林市立栗須小学校 教諭)
<授業づくり研究グループ>			研 究 員	齊藤 紗織	(小林市立小林小学校 教諭)
主任研究員	三輪 正憲	(小林市立野尻小学校 教頭)	研 究 員	橋口加代子	(小林市立細野小学校 教諭)
運営委員	山口 弘訓	(小林市立紙屋小学校 教諭)	研 究 員	谷 佳子	(小林市立東方小学校 養護教諭)
副運営委員	郷田良太郎	(小林市立永久津小学校 教諭)	研 究 員	松下 良子	(小林市立小林中学校 教諭)
研 究 員	谷口 慶彦	(小林市立南小学校 教諭)	研 究 員	濱脇きよみ	(小林市立細野中学校 教諭)
研 究 員	宮本 桃衣	(小林市立三松小学校 教諭)	<コンサルタント>		
研 究 員	湯淺 美紀	(小林市立野尻小学校 教諭)	平川 康子	(小林市立小林小学校 指導教諭)	
研 究 員	橋元 一博	(小林市立西小林中学校 教諭)	黒木 由美	(小林市立三松小学校 指導教諭)	
研 究 員	尾崎 瑞代	(小林市立永久津中学校 教諭)	中山 新吾	(小林市立三松中学校 指導教諭)	
研 究 員	日高 幸浩	(小林市立東方中学校 教諭)			
研 究 員	酒井 康	(小林市立三松中学校 教諭)			